

## 否定的真理の問題

### truthmaker 理論における非全面主義への批判

雪本 泰司

本稿では、truthmaker 非全面主義による否定的真理の問題の解決策を批判する。否定的真理の問題とは、ドラゴンが存在しない、などの否定的真理は何によって真なのか、という問題である。古代から知られるこの問題は、Molnar (2000) による問題の定式化以降、今に至るまで多くの解決策が提出されてきたし、今も提出され続けている。この問題は分析形而上学における truthmaker (命題を真にする存在者) という考えをめぐる立場の対立に関わっており、この問題を考えることによって、様々な形而上学の問題が発生してくるという性格を持っている。本稿で扱うのは、この問題の非全面主義という立場からの解決策である。これを検討し、批判することが本稿の目的である。

本稿の概略は以下のようなになる。まず、truthmaker という考えを導入することの正当性を信じる truthmaker 論者と、そうは考えない truthmaker 虚無主義者との間の対立の前提を確認する (1 節)。次に、否定的真理の問題が、四つのもっともらしい前提から反直観的結論が出てくるという問題であることを確認する (2 節)。そして、この問題が truthmaker についての三つの立場の対立に関わっていることを確認する。三つの立場とは、すべての真理は truthmaker を持つとする全面主義、ある真理は truthmaker を持つ(ある真理は持たない)とする非全面主義、すべての真理は truthmaker を持たないとする虚無主義、の三つである。さらに、2 節で確認した否定的真理の問題の前提のどれを否定するか、あるいは結論を肯定するかで問題解決の選択肢が分かれることを確認する (3 節)。そのうえで、選択肢の一つである非全面主義的解決を批判する。まず既存の批判を紹介し、次に秋葉(2011)が提案する非全面主義を採用する論証がまだうまくいくわけではないことを論じる (4 節)。

## 1. 实在論的直観と真理の非対称性

否定的真理の問題は、命題を真にするもの、truthmaker という存在者を扱う分野において引き起こされる問題である。この次の節ではその問題を確認するが、それに先立って、truthmaker という考えの導入を動機づける直観について、まずは紹介しておこう。

次のような状況を想定しよう。この宇宙についてのすべての真理が書かれている本がある。どのページをめくっても、そこには真理が書かれている。このとき、「宇宙が現にこのような仕方存在するのは、この本に書かれていることが真であるからだ」と主張することには、違和感が伴うだろう。事柄はそうではなく、むしろ「この本に書かれていることが真であるのは、書かれたとおりの仕方宇宙が存在しているからである」と述べたくなる。

このように、「どれが真理であるかによってどのような世界が存在するかが決まるのではなく、どのような世界が存在するかによってどれが真理かが決まる」という直観を、实在論的直観<sup>1</sup>と呼ぼう。

さて、この直観がなぜ truthmaker という考えを動機づけると考えられるのを見ておこう。次の真理の非対称性 [Rodriguez-Pereyra 2005, Dodd 2007, Liggins 2008] は、上の实在論的直観を反映していると考えられる(ただし〈〉は命題を表すものとする)。

- (1) 〈p〉が真であるのは、p だからである。(〈p〉 is true because p.)
- (2) p であるのは、〈p〉が真であるからである。(p because 〈p〉 is true.)

(1) は拒みがたいが、(2) は受け入れがたい。たとえば、「〈雪は白い〉が真であるのは、雪が白いからである」という主張は拒みがたいが、「雪が白いのは、〈雪は白い〉が真であるからである」という主張は受け入れがたい。

このような非対称性が真理にはある。しかし、なぜこのような非対称性があるのだろうか。この非対称性がもしも实在論的直観を反映しているものであると考えれば、〈雪は白い〉を真にする存在者、すなわち truthmaker を導入する動機が出てくる。truthmaker 論者は、because の後ろにある雪が白いことは世界の

側の存在者であり、それが〈雪は白い〉を真にする、とすることができる。

truthmaker の存在を認めれば、世界の側の存在者、つまり truthmaker が真理の根拠であり、真理が truthmaker の根拠なのではないと説明できる。命題を真にするもの、truthmaker という考えを認めなければ、真理のこの非対称性を説明することはできない。なぜなら、この非対称性は、「真理は存在に依存しており、その逆ではない」という、實在論的直観から由来するからである。このようにして、truthmaker を導入した方が良いという動機を、實在論的直観から得られることになる [Rodriguez-Pereyra 2005]。

しかし、真理の非対称性を説明する方法には、truthmaker 理論と競合するアプローチがある。それは、truthmaker という考えを否定する Dodd (2007) がとる説明である。Dodd は、この非対称性は實在論的直観から由来するのではなく、理解における依存関係から由来するのだと主張する。たとえば、〈雪が白い〉は真であるということを理解するためには、雪が白いことを理解していなければならないが、雪が白いことを理解するために、〈雪が白い〉は真であることを理解する必要はない。この説明によって、真理の非対称性は説明できるのであり、真理の非対称性を存在論的な依存から説明する必要はないと結論する。

truthmaker の存在を認める truthmaker 論者と、truthmaker の存在を認めない truthmaker 虚無主義の主な対立点の一つはこのようになっている。虚無主義者は、truthmaker 理論を實在論的直観が動機づける、ということそのものを疑っている。實在論的直観が正しいと仮に認めたとしても、そのことをもって truthmaker の存在を認める理由にはならない。なぜなら、真理の非対称性という説明すべき事柄は、實在論的直観とは無関係だからである。これが虚無主義から truthmaker 理論に寄せられる批判である [Dodd 2007, Liggins 2008]。

truthmaker 論者は、真理の非対称性が、真理の根拠である truthmaker を認めることによってのみ説明できるということを示さなければならない。さもなければ、なぜそのような怪しげな存在者の存在を動機もなく認めなければならないのか、という疑念に正当に答えることはできないだろう<sup>2</sup>。

このような対立構造を見たうえで、否定的真理の問題とはいかなる問題なのかを次の節で確認することにしよう。

## 2. 否定的真理の問題

否定的真理の問題を確認するために、まずは否定的でない真理の truthmaker から考え始めよう。truthmaker とは、真理の存在論的根拠となる存在者である。根拠であるからには、それが真にする命題が真であることを保証しなければならない。言い換えれば、それが存在することによってその命題が偽である可能性を排除しなければならない。

(3)〈ソクラテスは存在する〉

(4)〈このバラは赤い〉

命題 (3) を真にするものは、ソクラテスという個別者である。ソクラテスが存在するのに (3) が偽になることはないからだ。しかし、(4) を真にするものはこのバラという個別者でも、赤さという普遍者でもない。このバラと赤さの二つが存在しても、このバラは白いかもしれないし、赤さは隣のバラで例化されるかもしれない。

(4) を真にする truthmaker の候補として代表的なものは、このバラが赤いことという事態と、このバラの赤さトロープである。このバラが赤いことという事態が存在すれば、このバラが赤さを例化していない可能性は排除される。このバラの赤さトロープが存在すれば、トロープは別の個別者に現れないので、このバラも存在する。よって、このバラが赤くない可能性は排除される。この先の議論には影響しないのでここでは事態を選んで話を進めよう。

では、次の否定命題を真にするものは何だろうか。

(5)〈ドラゴンはいない〉

(4) のように事態を truthmaker としようにも、ドラゴンがいけないという事態は、どのような構成要素を持つ存在者であるのか定かではない。存在しないドラゴンを構成要素に持つような存在者は、直観的には存在すると思えない。ではこのような否定的事態が存在しないとすれば、否定的事態のような反直観的

な存在者ではなく、馴染み深い存在者が命題 (5) を真にするのだろうか。しかし、直観に適うどんな存在者も、ドラゴンが存在する可能性を排除することはないように思われる。たとえばソクラテスの存在はドラゴンの存在する可能性を排除しない。

ここまでは、真な命題には truthmaker が必ず存在すると仮定されていた。ここで、命題 (5) のような否定命題が真であるときは存在しないものがそれを真にすると認めよう。命題 (5) は、ドラゴンの不在のような、存在者でないものによって真になる。しかしそうすると、この世界についての真理がこの世界によって決まらない、ということになる。

この問題について、現在の議論の基礎となったのは Molnar の論文である。問題は以下の四つの前提から引き起こされる [Molnar 2000]。

- (i) 世界は存在するすべてである。
- (ii) 存在するすべては肯定的である。
- (iii) 世界についてのある否定的主張は真である。
- (iv) 世界についてのすべての真な主張は、存在するあるものによって真にされる。

これらはどれも直観的には正しい。だが、(ii)-(iv) を合わせると、否定的主張が肯定的存在者によって真にされる、ということになる。まずはそれを確認しよう。(iii) 世界についてのある否定的主張は真である。例としてここでは、世界についての真な否定的主張を「ドラゴンはいない」であるとしておこう。(iv) 世界についてのすべての真な主張は、存在するあるものによって真にされるから、「ドラゴンはいない」は存在するあるものによって真にされる。そして、(ii) 存在するすべては肯定的であるから、「ドラゴンはいない」は肯定的存在者によって真にされる。

存在者が肯定的であるとはどのようなことかについては議論があるが、ここでは踏み込まない。(ii) では、否定的事態などの奇妙な存在者は存在しない、といった直観が表わされている。たとえば、このバラや、このバラは赤いなどの肯定的事態などは、肯定的存在者である。このような存在者が、「ドラゴン

いない」などの、世界についての否定的主張を真にするというのは反直観的である。というのも、どんな肯定的存在者が存在することも、ドラゴンが存在することと両立可能であるように思われるからである。

この反直観的結論ではなく、否定的主張は存在しないものによって真にされる、という結論が出るように (iv) を修正したとしよう。つまり、世界についてのある真な主張(たとえば「ドラゴンはいない」)は、存在するものによって真にされない。しかしこの場合は、(i) 世界は存在するすべてであるから、世界についての主張「ドラゴンはいない」が世界によって真にされない、という反直観的結論を招く。これが否定的真理の問題である。

否定的真理の問題は古くから知られる難問<sup>3</sup>だが、現代においては上のように設定され、特に、truthmaker に関する三つの立場の対立に大きな影響を与える問題となっている。このことを次の節で確認しよう。

### 3. truthmaker に関する三つの立場と問題解決の選択肢

truthmaker には様々な特徴づけが提案されているが、どの特徴づけが良いかという議論には踏み込まない。本稿では必然性による標準的な特徴づけを採用しておく。

ある存在者  $e$  が命題  $p$  の truthmaker である  $\Rightarrow$  必然的に、 $e$  が存在するなら  $p$  は真である [Rodriguez-Pereyra 2006, p.188]

truthmaker 論者と呼ばれる者は、少なくとも次の原理を採用している。

(6) ある真理は truthmaker を持つ。

この原理を受け入れない、つまりすべての真理は truthmaker を持たないと主張するなら、その人は truthmaker 虚無主義者である。虚無主義者は、truthmaker というアイデア自体が間違いだと主張する。一方、この原理を受け入れて、さらに、truthmaker 原理 (TM 原理と呼ぶことにしよう) と呼ばれる次の原理を採

用する人は、truthmaker 全面主義者である。全面主義は、truthmaker を持たない真理を認めない。

(7) すべての真理は truthmaker を持つ。

(7) を否定して (6) を受け入れる、つまり、ある真理は truthmaker を持たないが、ある真理は truthmaker を持つと主張するなら、その人は truthmaker 非全面主義者と呼ばれる。非全面主義者は、(7) の TM 原理を適用する真理の範囲を制限した truthmaker 論者だとも言える。この言い方では、TM 原理を適用できる真理がないと主張するのが虚無主義者である。

truthmaker についてこれら三つの立場があり、どの立場が正しいのかについて論争が続いているという状況がある。この論争は、truthmaker を使った他の分野での議論や、真理の本性についての議論にも影響を及ぼす。そして、この論争において中心的な話題となるのが、否定的真理の問題なのである。なぜなら、全面主義者は (7) すべての真理は truthmaker を持つ、を保持するので、Molnar の (iv) 世界についてのすべての真な主張は、存在するあるものによって真にされる、を保持しなければならない。一方、もし (iv) を否定するならば、世界についてのある真理は truthmaker を持たないことになるので、非全面主義者になる。また、虚無主義者であれば、どんな真理も truthmaker を持たないことになるのだから、(iv) は拒否される。

このように、否定的真理の問題を解決するうえで、(iv) を否定するかどうかということが、TM 原理を適用する範囲についての問題に関わってくる。事実、多くの truthmaker 論者が、TM 原理を弱めて非全面主義者になるのは、否定的真理に truthmaker を与えるのが困難だからであり、虚無主義者が truthmaker 理論は失敗していると論じる根拠も、否定的真理の truthmaker が与えられないということなのである。

ここで、Molnar の定式化に沿って、否定的真理の問題解決の選択肢を整理しておこう。

(iv) を拒否		(iv) を肯定(全面主義)		
(6) を肯定	(6) を拒否	(ii) を拒否	(iii) を拒否	結論を肯定
非全面主義	虚無主義	Armstrong 等	Mumford	Cameron 等

(iv) を否定する解決には二種類がある．truthmaker について非全面主義をとる解決 (Mellor 等) と、虚無主義をとる解決 (Dodd 等) である．全面主義には選択肢が三つある．(ii) を否定する解決 (Armstrong, Jago 等)、(iii) を否定する解決 (Mumford)、結論を肯定する解決 (Cameron, Schaffer 等) である．(i) を拒否するまともな解決策はこれまでのところ提案されていない．

これらのいずれも、それぞれの難点を抱えている．次節では、この選択肢のうち、非全面主義の抱える困難を見ていこう．

#### 4. 非全面主義者の解決への批判

この節では、非全面主義の解決策への批判を行う．まず、理論的コストにおいて非全面主義が全面主義よりも優れていることはないとする批判を紹介する．そして次に、非全面主義を擁護する秋葉 (2011) の説に対して批判を加える．

truthmaker 論者が全面主義を避けて非全面主義に落ち着く理由の一つは、全面主義が理論的コストを伴うからである．たとえば、ドラゴンがいないこと、のような否定的事態を存在論に導入するより、そういった存在者なしで済ませられる方が儉約的である．非全面主義者は、どの真理も truthmaker を持たないと主張するのではなく、奇妙な存在者の存在を主張することもない点で、三つの立場の中では最も常識的で穏健な立場である．

TM 原理の適用範囲から否定的真理を外すことで、否定的真理の truthmaker にコミットせずに済むことは、非全面主義の大きなアドバンテージであると考えられる．では、TM 原理が適用されるのは具体的にどのような命題になるのだろうか．

Mellor (2009) は、truthmaker を持つ命題の範囲を決めるものは何かということをも真剣に考えている非全面主義者の一人である．彼によれば、一次 (primary) 命題は truthmaker を持つが、非一次命題は truthmaker を持たない．非一次命題とは、一次命題から真理関数的に決定される命題である．真理関数的でない命

題は、原子的 (atomic) ではない分子的 (molecular) 一次命題として, truthmaker を持たなければならない. たとえば信念命題や確率命題, 反事実条件命題は, その命題の部分として別の原子的な一次命題を持つが, その一次命題の真理関数ではないので, 分子的一次命題として truthmaker を持たなければならない.

真理が truthmaker を持つとき, その真理は実在に直接真にされ, 真理が truthmaker を持つ別の命題の真理関数であるとき, 間接的に真にされる. 直接的に真にされることと, 間接的に真にされることの間に, 真理の程度の差はない. なぜなら, いずれの場合も, 一次命題の truthmaker が存在すれば, その命題が偽になる可能性は排除されるからである. 実在が決まれば, 真理も決まる. 分子的一次命題は, 真理関数的でないから, 間接的に真にされることができない. 一次命題の truthmaker が存在するのに偽になる可能性が残る. したがって, 実在が決まることで真理が決まるという直観を維持するためには, 分子的一次命題にも truthmaker が必要なのである.

この立場には次のような反論がなされている [Jago 2012].

(8)〈マックスはドラゴンがいないことを知っている〉

命題 (8) は否定命題だと仮定する. ここで次のような命題を考えよう.

(9)〈¬(マックスはドラゴンがいないことを知っている)〉

(9) は (8) の否定なので, (8) が否定命題だとすれば (9) は肯定命題である. しかし, (9) はマックスがいないとしても真であり, 誰もドラゴンという言葉を知らないとしても真なので, (9) が真であるために何か肯定的存在者があるのではない. しかし, 非全面主義は否定的存在者を導入していないので, (9) は真であるにもかかわらず truthmaker を持てない. 肯定命題が真であるのは truthmaker を持つときだけなので, (9) は肯定命題ではない. これは矛盾なので, (8) は肯定命題である.

(8) は非一次命題ではない. なぜなら, 〈ドラゴンがいない〉が真だとしても, (8) が偽である可能性は排除されないからである. よって, Mellor に従えば, (8)

は分子的一次命題である。分子的一次命題は truthmaker を持たなければならない。

必然的に、(8) の truthmaker が存在すれば、(8) は真である。知識は事實的 (factive) なので、必然的に、(8) が真なら〈ドラゴンがいない〉も真である。また、必然的に、〈ドラゴンがいない〉が真であればドラゴンはいない。したがって、(8) の truthmaker はドラゴンの存在を必然的に排除する。

しかし、ある存在者が別の存在者を必然的に排除するのはどのようにしてなのだろうか。これを説明するためには、全面主義と同じ道具立てを使うしかなくなってしまう。新たな存在を導入するにせよ、対応者関係を変更するにせよ、存在者が存在者を排除することを説明するためにこうした対処を行うなら、非全面主義が全面主義に対して持っていた理論的コストにおける優位性は失われてしまう。

次に、秋葉による非全面主義の擁護を検討しよう。秋葉は、「全面主義を受け入れると、論理定項を含んだある種の推論に認められるべき論理的妥当性を認められなくなるから」全面主義を拒否するべきだと言う[秋葉 2011, p. 125]。以下の記述は秋葉の主張の概略である。たとえば、任意の命題  $p$  と  $q$  について、次の推論は論理的に妥当なものと考えられる。

(C)  $p$  が真であり、かつ、 $q$  が真である  $\Rightarrow p \wedge q$  が真である

(C) が論理的に妥当であるとは、(C) の前件が成り立つとき、世界が他の点でいかなる在り方をしていようとも、(C) の後件が成り立つことが無条件に保証されるということである。

全面主義者は、(C) を次のように理解しなければならない。 $p$  と  $q$  が偶然的命題であるとき、(C) の前件、後件が成り立つのは、それぞれ次の(C1)、(C2) が成り立つときである。

(C1) ある対象  $e_1$  が存在し、 $e_1$  は  $p$  を真にし、かつ、ある対象  $e_2$  が存在し、 $e_2$  は  $q$  を真にする。

(C2) ある対象  $e$  が存在し、 $e$  は  $p \wedge q$  を真にする。

よって、(C) が論理的に妥当であるのは、次の推論  $(C1) \Rightarrow (C2)$  が妥当である場合である。

(C\*)(ある対象  $e1$  が存在し、 $e1$  は  $p$  を真にし、かつ、ある対象  $e2$  が存在し、 $e2$  は  $q$  を真にする)  $\Rightarrow$  ある対象  $e$  が存在し、 $e$  は  $p \wedge q$  を真にする

しかし、(C\*) は世界の在り方についての実質的主張である。したがって、(C) は、世界が (C\*) のような在り方、つまり無制限合成の原理を許容するような在り方をしているがゆえに妥当ということになる。しかし、論理的に妥当であるなら、世界の実質的な在り方にかかわらず、無条件に成り立たなくてはならない。全面主義は、論理的妥当性についての標準的な見解を損なうからこそ拒否されるべきである<sup>4</sup>。

秋葉は、実在論的直観が、次の二つに精緻化できるとしている。

(10) 実在のうちに根拠を持つのは、偶然的真理一般である。

(11) 真理が実在のうちに根拠をもつとは、それが truthmaker をもつことに他ならない。

その上で、

(11') 真な命題  $p$  が実在のうちに根拠を持つとは、 $p$  の真理性に対して、何らかの truthmaker の存在を出発点とした多かれ少なかれ直接的な説明が存在することである。

というように (11) を修正することで実在論的直観を精緻化しなおせば、非全面主義も実在論的直観からの動機を得られるとする。

秋葉による非全面主義の擁護は上のようなになる。しかし、(11') は真理が実在のうちに根拠を持つという実在論的直観の適切な精緻化になっているのだろう

か。

否定的真理の場合を考えよう。非全面主義は次のような説明を採用する。¬p が真であるのは、p の truthmaker が不在からである。まずこれは p の truthmaker の存在を出発点とした説明ではないので、(11') を満たしていない。そこで、

(11'') 真なる命題 p が実在のうちに根拠を持つとは、p の真理性に対して、何らかの truthmaker の存在あるいは不在を出発点とした多かれ少なかれ直接的な説明が存在することである。

というように修正したとしよう。すると、¬p の真理性を、それに対応する p の truthmaker の不在によって説明することと同様に、p の真理性を ¬p の truthmaker の不在によって説明することは (11'') には反しない。たとえば説明は次のようになる。〈ソクラテスが存在する〉が真であるのは、〈ソクラテスは存在しない〉が truthmaker を持たないからである。すべての論理結合子を含まない肯定命題にこのような説明を与えることが許されるなら、truthmaker の不在を出発点としてすべての真理を説明することもできるはずである。

しかし、このように説明すると結局のところ「真理が実在に根拠を持つとは、truthmaker の不在を出発点とした説明があるということだ」ということを認めることになる。これは虚無主義と紙一重である。虚無主義とは違ったやり方で真理の非対称性を説明するなら、どう説明されることになるのだろうか。ここで、その理由を実在論的直観に求めることは難しいように思われる。〈ソクラテスが存在しない〉が truthmaker を持たないということや、〈ソクラテスが存在する〉が truthmaker を持たないことは、実在のうちの根拠とは言えないと考える理由が二つある。

一つ目の理由は次のようになる。p が truthmaker を持たない、ということが、真理が実在のうちに持つ根拠であるとすれば、同様に、p が truthmaker を持つ、ということも真理の根拠となるはずである。そうすると、p が真であることの存在論的根拠は、p が truthmaker を持つ、ということで十分であり、p を根拠づける truthmaker とは一体何なのかということを説明する必要はなくなる。しかし、そうすると、truthmaker 理論の目的の一つである、「イカサマを押さえる (to

catch cheats)」という役割はほとんど失われてしまう。

たとえば、心的状態の帰属を行動の傾向性だとするライルの行動主義に対し、truthmaker 理論を用いてしばしば次のような議論が行われる。ライルの行動主義は、人が行動の傾向性を持つということの truthmaker を明らかにしないで、それが真であると主張している。これは存在論的なイカサマである、という批判である。

だが、もしも  $p$  が truthmaker を持つ、ということが  $p$  が真であること存在論的根拠として十分なのだとすれば、ライルの行動主義者は、人がしかじかの行動の傾向性を持つという命題は truthmaker を持つ、と答えるだけでイカサマは通ってしまう。

ここで知りたいことは、その truthmaker が何なのか、ということである。だが、それを説明する責任はライル主義者にはもはやない。 $p$  が truthmaker を持たないということが実在のうちの真理の根拠であるのなら、 $p$  が truthmaker を持つということが実在のうちの真理の根拠であるということを否定する理由は何もない。

したがって、真である  $\neg p$  が実在のうちに根拠を持つということは、 $p$  が truthmaker を持たないということである、と考えることは truthmaker 理論を他の議論に応用させる可能性を著しく減少させてしまう。truthmaker がそのように役に立たないものになってしまえば、命題を真にする存在者を存在論の中に導入することの利益も減少してしまう。

真である  $\neg p$  が実在のうちに持つ根拠は、 $p$  が truthmaker を持たないということである、とは言えないと考える二つ目の理由は次のようになる。真理の存在論的根拠であるからには、その根拠が存在することによって、真理が保証される、すなわち命題が偽である可能性が排除されるのでなければならない。〈このバラは赤い〉という真理の存在論的根拠としてこのバラや、赤さという存在者がその役割を果たせないのは、それらがこの命題が偽である可能性を排除しないからであった。このバラが赤いことという事態が存在するなら、その可能性は排除される。では、 $p$  が truthmaker を持たないということは、 $\neg p$  が偽である可能性を排除するのだろうか。ここで問題となるのは、 $p$  が持たない truthmaker とは何か、ということである。たとえば、〈ドラゴンが存在する〉が、その

truthmaker としてドラゴン<sub>1</sub>を持たないとしよう。このとき、そのドラゴン<sub>1</sub>が存在しないだけでは、〈ドラゴンは存在しない〉が偽である可能性は排除されない。ドラゴン<sub>1</sub>が存在せず、かつドラゴン<sub>2</sub>が存在するかもしれないからである。このように、ドラゴン<sub>1</sub>が存在しない、ドラゴン<sub>2</sub>が存在しない、…、ドラゴン<sub>n</sub>が存在しない、… というように、どの存在者が存在しないと考えても、〈ドラゴンは存在しない〉が偽である可能性は排除されない。p が truthmaker を持たないという言い方は、一体何がないと言われているのが不明瞭である。全面主義は〈ドラゴンは存在しない〉の存在論的根拠として、その命題が偽であることを排除する存在者が何であるかを明らかにしようと試みてきた。非全面主義は、このような神秘的な存在者を拒否し、実際には〈ドラゴンが存在する〉のどの truthmaker がないとしても〈ドラゴンは存在しない〉が真であることの保証はなされないにもかかわらず、「p の truthmaker がない」ことによって  $\neg p$  の真理が保証される、という神秘的な説明を行っているように見える。その説明は、 $\neg p$  の真理が何に存しているのかを明らかにしなければならない。

以上の理由から、真な命題 p や  $\neg p$  が実在のうちに根拠を持つことが、 $\neg p$  や p が truthmaker を持たないということによる説明、すなわち truthmaker の不在による説明ではないとすれば、非全面主義は、真理の非対称性が実在論的直観に由来するとは説明できない。すべての真理を truthmaker の不在によって説明したとして、 $\neg p$  の truthmaker が不在であるのは、p が真であるからであると説明してはいけない理由を実在論的直観が与えてくれることはない。実在論的直観は、実在が真理を決定し、その逆ではないということを教えてくれる。しかし、 $\neg p$  の truthmaker が不在であることが実在のうちの根拠でないならば、真理の非対称性を実在論的直観に由来するという仕方で説明が行えるという truthmaker の動機は失われる。そして、truthmaker の存在に訴えないとしても、虚無主義のように理解の非対称性に基づけば、真理の非対称性は説明できるのである。もしも、ある真理は truthmaker の不在で説明するが、ある真理は truthmaker の存在で説明する、という方法をとったとしても、今度は (10) 実在のうちに根拠を持つのは偶然的真理一般である、ということ否定してしまう。いずれにせよ、実在論的直観から動機を得ることができなくなる。

さらに、先に紹介した Jago の反論は、秋葉の提案した基準について困難を引

き起こすように思われる。「〈マックスはドラゴンがいないことを知っている〉は真である $\Rightarrow$ 〈ドラゴンがいない〉は真である」は、「知っている」の言葉の定義によって真であるから分析的真理である。分析的真理は、世界の在り方と無関係に妥当する。非全面主義は、〈マックスはドラゴンがいないことを知っている〉が真であるという前件を、「ある対象  $e$  が存在し、 $e$  が〈マックスはドラゴンがいないことを知っている〉を真にする」と理解しなければならない。そして、〈ドラゴンがいない〉は否定的真理なので、後件は「どんな対象  $e$  についても、 $e$  が〈ドラゴンがいる〉を真にすることはない」と理解されなければならない。しかしそうすると、分析的真理の妥当性は、次に依存することとなる。

(C\*\*) ある対象  $e$  が存在し、 $e$  が〈マックスはドラゴンがいないことを知っている〉を真にする $\Rightarrow$  どんな対象  $e$  についても、 $e$  が〈ドラゴンがいる〉を真にすることはない

しかし、これは世界の在り方についての実質的主張である。これは、世界がどのような在り方をしようとも成り立つという分析的真理の考え方を損なう。よって、秋葉が提案した TM 原理を制限する理由は、非全面主義さえも拒否してしまう。

以上の考察から、秋葉による実在論的直観の精緻化と、全面主義を拒否する基準には少なくとも次のような問題点があるように思われる。まず、実在論的直観の精緻化において、根拠とは何であるかが不明確であり、truthmaker に言及する説明がなぜ根拠と見なせるのかは明らかではない。 $\neg p$  が実在のうちに持つ根拠として  $p$  が truthmaker を持たないということが認められるなら、 $p$  が truthmaker を持つということや、 $\neg p$  が truthmaker を持たないということも、 $p$  の実在のうちの根拠として認められるのだろうか。認められないのなら  $p$  が truthmaker を持たないことだけが根拠になりえるのはなぜなのか、という基準を明らかにする必要がある。

また、 $p$  が truthmaker を持つ場合はその truthmaker の無数の候補のうちの一つでも存在すれば  $p$  が偽である可能性は排除されるが、ある命題については  $p$  が truthmaker を持たない場合はその truthmaker の候補のどれが存在しなかった

としても  $\neg p$  が偽である可能性は排除されない。このとき、 $p$  が truthmaker を持たないということはいかなる意味で真理の根拠なのかを明確にする必要がある。

さらに、命題 (8) に truthmaker を認めないという選択肢をとるのならば、一次命題とは何であり、間接的に根拠づけるとはどのようなことなのかを明確にしなければならない。実在が一次命題の真理を根拠づけ、一次命題の真理関数として非一次命題の真理が根拠づけられる、という意味で真理が実在に根拠を持つのであれば、(8) は一次命題でなければならない。そうではなく、非真理関数的な命題であっても非一次命題として truthmaker を持たないのだとすれば、(8) が偽である可能性を排除する仕方でも (8) を非真理関数的に間接的に根拠づけるものとは何なのかを明確化される必要がある。また、(8) が実際には真理関数的に別の一次命題から根拠を受け取るのだ、と主張するならば、(8) が根拠を受け取る一次命題が実際には何なのかを明らかにしなくてはならない。もしもその一次命題の中に別の事実的オペレータ(たとえばドレツキの情報、など)が入ってくるとすれば、問題は先送りにされたままになる。

ここまで見てきたように、非全面主義は、虚無主義に陥らずに済む基準がまだ見出されず、理論的コストにおいて全面主義と等しくなり、实在論的直観から動機を得られていない。实在論的直観から動機を得られる全面主義は、非全面主義より多い理論的コストを引き受けるのではないならば、有利であると結論できる。

## 5. おわりに

本稿の内容をまとめておこう。まず、真理の非対称性を説明するという課題に対して、实在論的直観から説明しようとする truthmaker 論者と、理解の非対称性から説明しようとする truthmaker 虚無主義者の対立がある。両者は共に实在論的直観と真理の非対称性があることは受け入れたうえで対立している。否定的真理の問題とは、もっともらしい四つの前提から反直観的な結論が出てしまう問題である。それは現代形而上学における truthmaker 理論をめぐる三つの立場の対立に関わっている。否定的真理の問題に対処する選択肢は、前提

のうちどれを否定するか、結論を肯定するかに応じて分かれる。本稿では、その中でも四つ目の前提を否定し、否定的真理が truthmaker を持たないと主張する非全面主義的解決を批判した。

本稿で検討できなかった立場として、虚無主義と、(ii), (iii) を否定する立場、結論を肯定する立場が残されている。このうち、(iii) を否定する Mumford (2005, 2007a, b) の解決に対しては、ここで行った非全面主義に対する批判と同様の批判が当てはまると私は考えている。虚無主義と全面主義のそれぞれの立場をさらに比較することが残された課題である。(ii) を否定する立場では、否定的事実という存在者が存在すると直接認めさせる論証を展開している [Barker & Jago 2012]。また、この立場は全面主義の他の選択肢を検討したうえで、自らの立場が最も有利だと主張している [Jago 2013]。結論を肯定する立場には、否定的真理の truthmaker として世界 (the world) を提案する Schaffer (2010a) と Cameron (2008) がいる。存在論的な先行性 (priority) において、Schaffer は全体が部分に先立つと考え、Cameron は部分が全体に先立つと考える。したがって、前者の場合、世界がすべての真理の唯一の truthmaker となり、後者の場合、否定的真理の truthmaker は世界だが、その他の真理の truthmaker は世界ではない。ところが、Cameron (2010) では、全面主義を受け入れ、かつ、説明のつかない存在者同士の必然的結合を認めないならば、Schaffer が提案する先行性一元論をとるしかない、という主張がなされている。

本稿では取り上げることができなかったが、秋葉 (2011) では一元論への批判も行われており、これについての検討も今後の課題である。

否定的真理が真であるのは何によるのか、という否定的真理の問題は、二千年以上の時を経ても解決されなかった難問である。どの選択肢をとったにせよ、一筋縄ではいかない。問題にうまく対処できたように見えても、他の前提との間で新たな問題が生じ始める。しかしこれは単なる哲学的パズルで終わるのではなく、世界に存在する基礎的存在者は何なのかという形而上学的問題へとつながっているのである。

## 註

1. truthmaker 理論は、しばしば、ライルの行動主義、時間の哲学における現在主義や、物理的対象の現象主義、等への反論に用いられる。そのため、「實在論的直観」から出発する truthmaker 理論を、反實在論的な立場の批判に使うことは、循環しているのではないかという指摘がなされてきた。しかし、「實在論的直観」は、他に良い名前がないからさしあたってこう呼ばれているにすぎず、それぞれの領域での個別の實在論を直接帰結するわけではない [Liggins 2008].
2. たとえば, Rodriguez-Pereyra (2009) に, truthmaker 理論の側から虚無主義者 Dodd への応答がある.
3. Armstrong (2004) によれば, プラトンの『ソピステス』にすでに現れている.
4. 秋葉がこのように言うとき, 問題は次のようであると私は理解している. ある存在者(ここでは  $e_1, e_2$ ) が存在するからといって, 別の存在者(ここでは  $e$ ) が存在するかどうかは別の問題である. ある存在者が別の存在者を伴うとすれば, それはたまたまその世界がそのような在り方をしているからである. とところが, 全面主義に従えば, 論理的なある種の推論が妥当であるためには, ある存在者が別の存在者を伴うということがどんな世界でも成り立つのでなければならない. しかし, 論理的な推論が妥当であることは, 世界の在り方にそのようなことは要求しないはずである. また, 否定的真理の場合, 「 $p$  は真でない  $\Rightarrow$   $\neg p$  は真である」が論理的に成り立つ. 全面主義の要求に従えば,  $p$  の truthmaker がなければ  $\neg p$  を真にする存在者があることになる. つまり, どんな世界でも, ある特徴を持つ存在者がいないことが, 別の存在者があることを必然的に伴うということになる. だが, 論理的な推論が妥当であることは, 世界の在り方にそのようなことを要求しないはずである. 非全面主義は, 連言の場合ならば,  $e_1$  と  $e_2$  が存在する  $\Rightarrow$   $e_1$  と  $e_2$  が存在する, ということを要求する. この要求が  $\Rightarrow$  の右と左で同じことを述べていることを考えれば, 世界の在り方に何かを要求してはいないと思われることができる. 否定の場合ならば,  $p$  の truthmaker がいない  $\Rightarrow$   $p$  の truthmaker がいない, ということを要求するので, 同様に問題は回避できる.

## 参考文献

- Armstrong, David Malet. *Truth and truthmakers*. Cambridge University Press (2004).
- Barker, Stephen, and Mark Jago. "Being positive about negative facts." *Philosophy and Phenomenological Research* 85.1 (2012): 117-138.
- Beebe, Helen, and Julian Dodd, eds. *Truthmakers: the contemporary debate*. Oxford: Clarendon Press (2005).
- Cameron, Ross P. "How to be a truthmaker maximalist." *Noûs* 42.3 (2008): 410-421.
- Cameron, Ross P. "From Humean Truthmaker Theory to Priority Monism." *Noûs* 44.1 (2010): 178-198.

- Cameron, Ross. "Truthmakers." *The Oxford Handbook of Truth*. Oxford: Oxford University Press. Acquired from URL=< <http://www.personal.leeds.ac.uk/~phlrpc/truthmakers%20handbook%20truth.pdf>> on March 1 (2013).
- Dyke, Heather, ed. *From Truth to Reality: New Essays in Logic and Metaphysics*. Routledge (2008).
- Dodd, Julian. "Negative truths and truthmaker principles." *Synthese* 156.2 (2007): 383-401.
- Jago, Mark. "The Truthmaker Non-Maximalist's Dilemma." *Mind* 121.484 (2012): 903-918.
- Jago, Mark. "The cost of truthmaker maximalism." *Canadian Journal of Philosophy* 43.4 (2013): 460-474.
- Liggins, David. "X—Truthmakers and the Groundedness of Truth." *Proceedings of the Aristotelian Society (Hardback)*. Vol. 108. No. 1part2. Blackwell Publishing Ltd (2008).
- Lowe, E. Jonathan. *Truth and Truth-making*. McGill-Queen's University Press (2009).
- MacBride, Fraser. "Truthmakers", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2013 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/spr2013/entries/truthmakers/>>.
- Mellor, David Hugh, Hallvard Lillehammer, and Gonzalo Rodríguez Pereyra, eds. *Real Metaphysics: Essays in Honour of DH Mellor*. Routledge (2003).
- Mellor, D. H. "Truthmakers for what?" *From Truth to Reality: New Essays in Logic and Metaphysics*. Dyke, Heather, ed. Routledge (2009).
- Molnar, George. "Truthmakers for negative truths." *Australasian Journal of Philosophy* 78.1 (2000): 72-86.
- Monnoyer, Jean-Maurice, ed. *Metaphysics and truthmakers*. Vol. 18. De Gruyter, 2007.
- Mumford, Stephen. "The true and the false." *Australasian Journal of Philosophy* 83.2 (2005): 263-269.
- Mumford, Stephen. "A New Solution to the Problem of Negative Truth." *Metaphysics and Truthmakers* 18 (2007a): 313.

- Mumford, Stephen. "III—Negative Truth and Falsehood." *Proceedings of the Aristotelian Society (Hardback)*. Vol. 107. No. 1pt1. Blackwell Publishing Ltd (2007b).
- Rami, A. "Introduction: Truth and Truth-Making" *Truth and Truth-making*. McGill-Queen's University Press (2009): 1-36.
- Rodriguez-Pereyra, Gonzalo. "Why Truthmakers." *Truthmakers: The contemporary debate*. Oxford: Clarendon Press (2005): 17-32.
- Rodriguez-Pereyra, Gonzalo. "Truthmakers." *Philosophy Compass* 1.2 (2006): 186-200.
- Rodriguez-Pereyra, Gonzalo. "Postscript to "Why Truthmakers"." *Truth and Truth-making*. McGill-Queen's University Press (2009) .
- Schaffer, Jonathan. "The least discerning and most promiscuous truthmaker." *The Philosophical Quarterly* 60.239 (2010a): 307-324.
- Schaffer, Jonathan. "Monism: The priority of the whole." *Philosophical Review* 119.1 (2010b): 31-76.
- 秋葉剛史「Truthmaker 原理はなぜ制限されるべきか」『科学哲学』44.2 (2011): 115-134.
- 佐金武, 梶本尚敏「Truthmaker 原理の制限は正当化されたか」『科学哲学』45.2 (2012): 131-134.